長野市立博物館

博物館だより

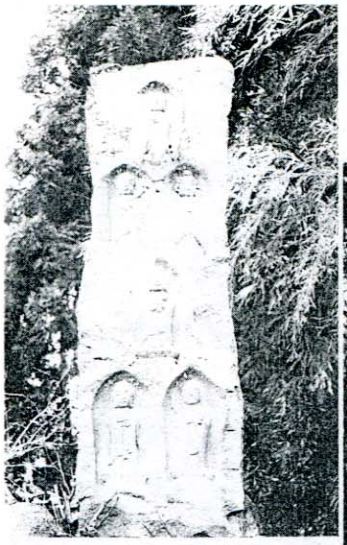
第63号

2005.3.31

Nagano City Museum

石造文化財から地域の特性を知ろう！

～戸隠地域の石造文化財調査報告書ができました～



①一石六地蔵（猿丸）

③行人塚（下祖山）

④鬼の塚五輪塔（志垣）

②守護不入の碑（中社）

⑤橋供養塔（諸沢）

①一石六地蔵　文政５年（1822）高さ243cm
　４段に６地蔵を彫り込んだ珍しい型

②守護不入の碑　享保年間？　高さ114cm
　戸隠山の独立性を表した石碑　別当乗因が建立

③行人塚　文政12年（1829）高さ140cm
　大日如来の胎蔵曼陀羅　旧道沿いにある

④鬼の塚五輪塔　中世　高さ165cm
　戸隠最大の五輪塔　鬼女紅葉の墓といわれる

⑤橋供養塔　嘉永７年（1854）高さ242cm
　新しい橋の安全と古い橋の供養を祈願したもの

それぞれの石造文化財にいろいろな願いが込められています（詳しくは次ページ参照）

戸隠地域の石造文化財をまとめた報告書完成！

平安時代からの歴史をもつ戸隠地域は、数多くの文化遺産が知られています。中でも、石造文化財は、その地域の歴史や特徴を伝える大きな手がかりとなっています。しかし、戸隠地域のものを全体的に調査した記録はありませんでした。

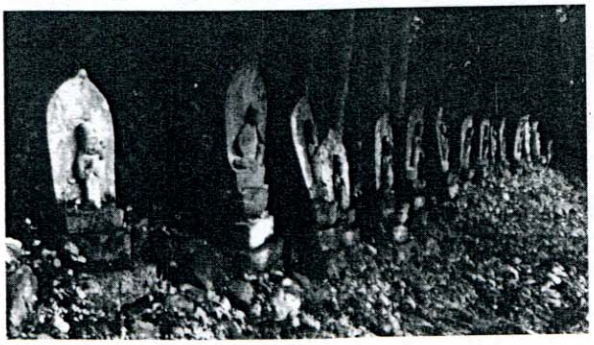
この度、10年以上にわたって村内の石造文化財を個人的に調べていた宮川俊春氏のデータの上に、戸隠村石造文化財調査委員会による２年間の調査を加えた成果がA4判400ページの報告書としてまとめられ、発刊されました。

調査した石造文化財は、地域内にある約2200点。17地区に分けて、石造物のデータと写真が掲載され、その特徴をまとめています。

「守護不入の碑」「女人結界の碑」など、山岳信仰の霊場として栄えた戸隠地域を特徴づける石造文化財も多数掲載してあります。また、修験者たちの修行の場であった戸隠三十三窟の調査記録は、見逃せません。調査委員が過去の記録をたどりながら、三十三窟を実際に踏査し、窟の位置を特定し、地図や写真に記載したのは、これまでに例がなく、今回の調査の中で一番見応えのある成果となっています。

また、集落の周辺に位置する、馬頭観音や道祖神、庚申塔、石祠、道標など山村の生活に密着した石造物も興味深いです。人々の信仰や習俗、昔の街道の位置や輸送手段等を伝える大事な記録となっています。

最近の社会の変化によって、これらの石造物は草に埋もれ、忘れ去られがちとなってきましたが、たくさんの人々の思いがこめられた大事な文化財であることを知りました。戸隠地域をより深く知るための基礎的な資料となる報告書だと思っています。ぜひ、ご一読ください。　（田辺智隆）



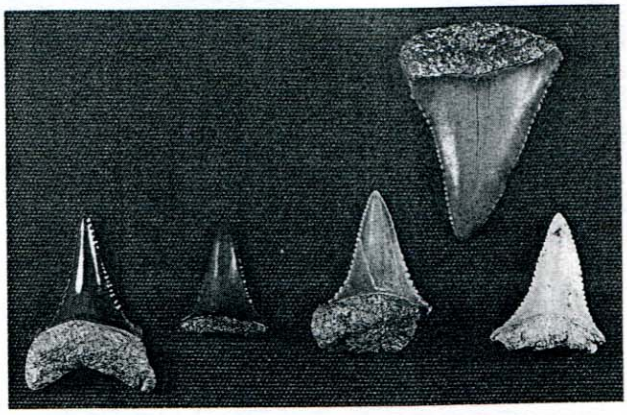
▲立ち並ぶ秩父三十三観音（田頭）

サメの歯化石を探しています

昨年8月1日、「青少年のための科学の祭典・松本大会（会場：信州大学理学部キャンパス）」で、化石を掘りだそう！というコーナーに協力しました 。戸隠から約250万年前の化石の入った砂岩を運び、化石を発掘体験をしました。この企画は大成功で、子どもたちが熱心に化石を掘りだしていました。その時、サメの歯の化石が見つかり、発見した小学生が持ち帰った、との情報が担当の大学生からありました。

この思わぬ発見におどろいたのは、資料を提供した側です。このサメの化石は山国信州に最後まで生き残っていたものになるからです。キチンと確認できれば、種類や当時の環境をさぐる大きな手がかりとなります。新聞を使って捜索を行いましたが、行方はまだわかっていません。情報をお持ちの方は、戸隠地質化石館までぜひご連絡をください。　（田辺智隆）

▲この石の中からサメの歯が…

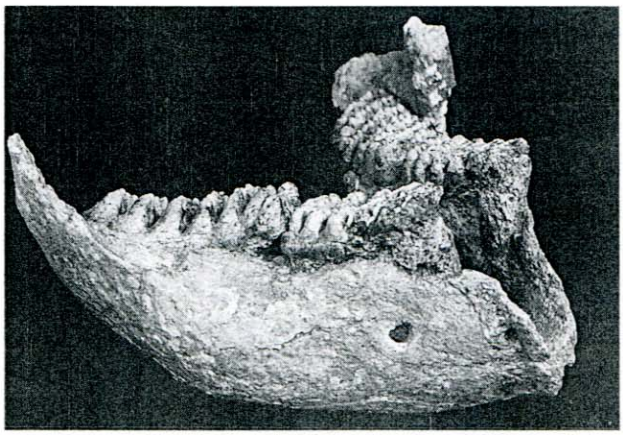


▲これまでに見つかっているホホジロザメの歯化石

戸隠地質化石館が新しく仲間入りしました

1月から長野市の博物館に仲間入りした戸隠地質化石館は、戸隠地域の南部、古くは柵（しがらみ）と呼ばれた地域にあります。

この地域は、長野県を代表する化石の産地として知られています。あの戸隠連峰や荒倉山などから化石が産出することは、江戸時代の書物にも紹介されています。明治・大正時代になると科学的な研究が始まり、これらが300～400万年前のもので、絶滅した種類の貝化石が含まれていることが明らかとなり、県内でも注目の場所となりました。



▲川下産のシンシュウゾウ下顎化石

▲戸隠地域で見つかる豊富な化石たち

こうした地域の宝を収集・保管し、研究を加え、地域の社会教育に役立てるための施設として、昭和55年（1980）11月、当館は郷土資料館としてオープンしました。建物は、昭和23年（1948）建築の古い木造校舎を利用しています。老朽化はしていますが、味わいのある雰囲気をもった館となっています。昭和58年（1983）、裾花川沿いの約300万年前の地層から、大変見事なシンシュウゾウの下顎化石が発掘されました。これは、長野県天然記念物にも指定され、この大発見をきっかけに化石や地質についての関心が高まり、昭和62年（1987）に地質化石館と改名し、戸隠産の化石と大地の生い立ちを扱う博物館へと変わりました。

▲旧校舎を利用したレトロな雰囲気があります

戸隠の魅力は、なんといっても本物の自然が残されていることです。化石や地層が館のすぐ近くで見られます。地層に触れたり、自分の手で発掘したりすることもできるので、体験型の学習をするにはもってこいの博物館です。当館では化石採集や地層見学をはじめ、戸隠の豊かな自然を探る活動のお手伝いを続けています。あの戸隠山をはじめ、太古は海の底だった長野市を実感できると思います。ちょっとわかりにくい場所にありますが、ぜひお立ち寄りください。　（田辺智隆）

連絡先　TEL&FAX 026-252-2228
e-mail:kaseki@avis.ne.jp
HP　http://www.avis.ne.jp/~kaseki/
休館日　毎週月曜日、祝休日の翌日、
冬期（12月1日～3月20日）
入館料　無　料

新しく加わった鬼無里・大岡・豊野の施設を紹介します!!

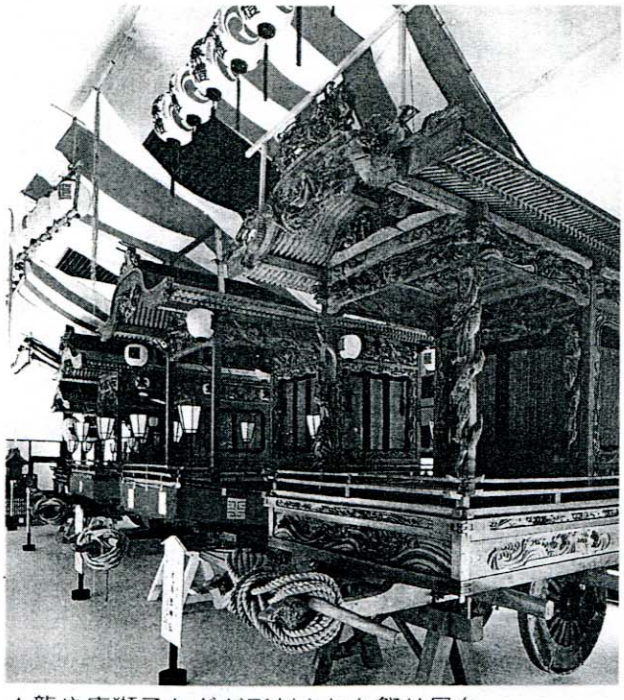
◆鬼無里ふるさと資料館

【交通】長野駅から信州大学教育学部前を通る国道406号を白馬方面に向かい、鬼無里支所を通過して右手にあります。車で約45分～50分ほどです。

【施設】並んで3棟あるうち中央の建物が旧歴史民俗資料館と呼ばれてきた施設です。鬼無里では400年前から麻を栽培し、村の経済を担う重要な作物でした。こうした「麻を通じて見る近代の村の暮らし」を1階に展示しています。麻の歴史、栽培から畳糸になるまでの生産工程を資料からたどることができます。2階は今から2000万年前以降の地殻変動や火山活動が活発だったころに海中にできた珍しい地形や奇岩などをテーマにした「鬼無里の地質と化石」を展示しています。

向かって右側の建物が旧山国文化伝承館と呼ばれていた施設です。江戸時代末期から明治時代初期の祭り屋台4台と神楽2台を展示し、屋台曳行が行われた華やかなりし頃の祇園祭りを伝えています。屋台を製作したのは宮大工の北村喜代松とその弟子たちで、屋台と神楽に彫刻された巧緻で繊細な作風をみることができます。

左側の建物が旧山村文化伝習館と呼ばれていた施設です。2階には鬼無里ゆかりの人々の足跡を中心に展示紹介しています。



▲龍や唐獅子などが彫刻された祭り屋台

北村喜代松（鬼無里村出身のふさと結婚）、喜代松の長男四海、四海の甥で後に養子となる正信のブロンズ像や大理石像の彫刻作品を展示しています。また北村喜代松の孫にあたる美術愛好家長谷鉄男氏が収集した近代日本の彫刻作品も北村父子の作品と共に並んでいます。

鬼無里が生んだ江戸時代後期の和算家寺島宗伴の資料（算具・算法を著術した稿本・測量道具・宗伴作成の村絵図・算額など）も展示しています。

1階はかつての鬼無里の経済を支えた農業、林業、養蚕の様子を伝える道具類とともに展示室中央には水車小屋や炭焼小屋を再現しています。

これまで3棟の建物には、個々の名称が付けられてきましたが、合併を契機に全体を一つの施設として位置づけ、「鬼無里ふるさと資料館」と命名しました。この名称は以前に村民から名称を公募した際に寄せられた中から選定しました。

【入館料】一般200円／高校生100円／小中学生50円（団体20人以上は2割引）

◆大岡歴史民俗資料館

【交通】長野駅から国道19号線で児玉橋の手前を左折し、大岡支所の向かいにあります。車で約1時間15分です。

【施設】2階が常設展示室になっています。展示室入り口に神面装飾の芦ノ尻道祖神が来館者を迎えます。信仰（仏具・仏像・神輿など）、暮らし（生活用具）、人生（婚礼用具・髪飾り・袴など）、産業（農具・養蚕・機織りなど）、歴史（大岡出土品・古文書など）、教育（教科書書類）の6コーナーに分けて展示しています。

◆豊野資料収蔵室

【交通】豊野支所の裏手の山にある長野盆地を眺望するりんごの丘公園内にあります。豊野支所から車で約5分ほどです。

【施設】平屋建ての建物で考古資料（上浅野遺跡・北土井下遺跡ほか発掘出土品）、歴史資料（古文書・教科書など）、民俗資料（発動機など近代農業機械機具・消防機械機具・生活用具・曳き屋台など）を収蔵しています。

大岡と豊野の施設は、職員が常駐しておりませんので、見学ご希望の方は事前に博物館までご連絡ください。

（山口　明）

第50回特別展『信州モノづくり博覧会』予告

江戸時代の距離測定器『道程車』（日本学士院蔵）

下の写真は、東京の日本学士院に所蔵される「道程車」と呼ばれる江戸時代の距離測定器です。作者は小諸城下市町の小林忠良という和算家です。和算とは、明治に入って西洋の数学が日本に導入されるに至って、それまでの日本独自の数学のことを指す呼び方です。

小林忠良は寛政8年（1796）に生まれ、幼少期から和算を好み、上田藩竹内善吾の門に入り関流と呼ばれる和算の流派を修めたといわれています。忠良は嘉永4年（1851）11月1日に「道程車」、「勧戒之器」を小諸城主・牧野康哉に献上し、牧野氏から2人扶持を賜り、帯刀を許されます。この時献上されたものが下の写真の道程車です。忠良はその後明治4年（1871）、76歳で亡くなりました。

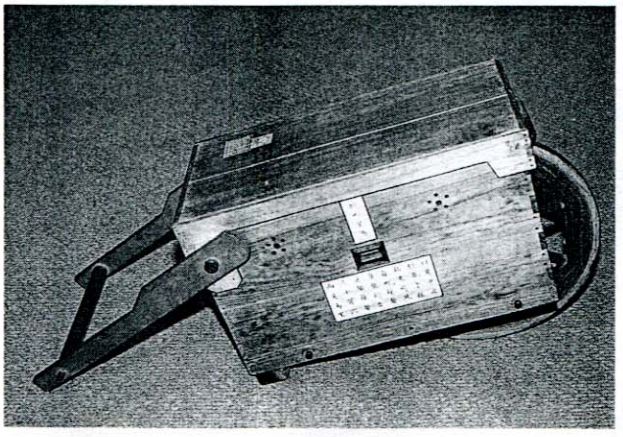
この道程車は高さ約30cm、幅26cm、奥行43.5cmで、木製の車輪のついた一輪車のようなものです。この箱を引いて歩くことにより、車輪の回転が大小6つの木の歯車によって伝えられ、左の窓に「間」が、右の窓に「町」が表示されます。ちなみに1間は約1.818m、1町は60間で約109.1mになります。さらに、1町ごとに鐘が鳴るようになっていて「鐘声三十有六而定為里」、つまり鐘の音が36回でちょうど1里になるという意味の貼紙がされています。

忠良の造ったものと同様の原理の測量器は、他に2台確認されています。1台は伊能忠敬記念館に所蔵される「量程車」と呼ばれるもの。もう1台は真田宝物館所蔵の「量程車」です。管見では現存するのはこの3台のみです。凹凸の激しい江戸時代の道路を引いての正確な測定は、これらの器械ではできなかったとされますが、国産測量機器として貴重な資料といえます。

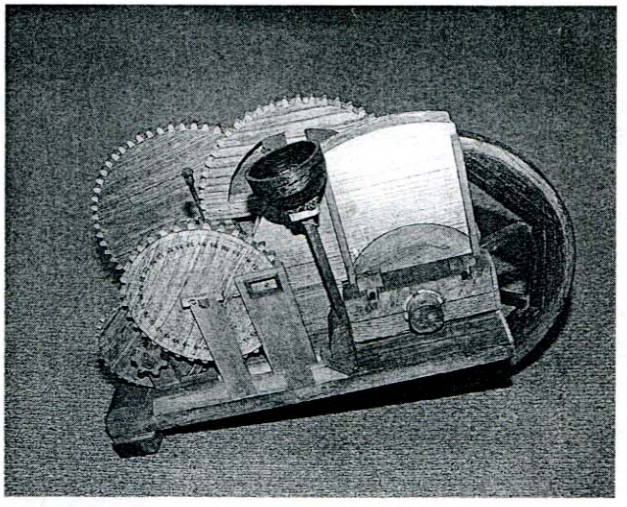
忠良の著書『算法瑚璉』によると、彼は文政7年（1824）から天保5年（1834）に自ら作った和算の難問を額に書いた算額を小諸金毘羅社、江戸の神田明神、大坂の天満宮、上田北向観音、京都の北野天満宮に奉納し、自身の数学の力量を世に問うています。残念ながらこれらの算額は現存していませんが、いずれも難問として当時から注目されていました。また、天保12年（1841）に出された「当時名人算者鑑」という番付には、忠良は西方前頭三段目、彼の師にあたる竹内善吾は堂々東方大関に挙げられ、当時信濃で和算が盛んに研究され、全国的にも有名だったことがわかります。

当館では江戸時代を中心に、測量や和算、医学、天文、和時計、本草学など日本人が生み出した技術や科学、産業に関する資料を一堂に会した特別展『信州モノづくり博覧会』を10月1日から行います。この道程車をはじめ、県内に残る資料と、全国の同様の資料を比較展示することで、信州の学問の地域性、特徴を浮かび上がらせようと準備を進めています。本特別展は、日本全国の研究者が参加する「我が国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査・研究」、略称「江戸のモノづくり」のみなさんと協力して行います。人とモノの交流から、新たな信州文化が創造され、発信できればと考えています。

（降幡浩樹）



▲小林忠良作　道程車（日本学士院蔵）



▲道程車の内部（同蔵）

総合講座「千曲川を歩く」　新年度参加者募集中

◆講座の内容

私たちの生活と千曲川との関わりを考える時にどのようなことがらが思い浮かぶでしょうか。洪水、堤防、水神、花泥、田んぼ、長芋、レンコン、牛蒡などと色々とあげることができます。こうした「千曲川」と「暮らし」を軸として、川と暮らしの有り様を実際に現地を探訪することで新たな発見をしようということをこの講座では主眼としています。先人の知恵、土地の記憶を発見・確認することで、身近な生活環境を様々な視点から見つめ直そうというねらいです。

◆講座の進め方

歴史、地形、環境、暮らし、信仰、自然など多様な課題を総合的に取り扱っていこうということで、総合講座と称しています。

2002年10月から講座は始まり、現在3年目に入りました。毎月第4土曜日に定例的に実施しています。午前中は室内にて事前学習を行い、主に地図に色塗りなどをしています。午後は事前学習を行った地区を実際に訪ね歩きます。歩くルートも参加者自身が決めて、探訪することもあります。地区の方々から洪水や千曲川との関わりなどの話の聞き取りも行うようにしています。

参加者が受け身ではなく、能動的に参加できるようにつとめています。そうすることで体験する楽しさも倍になると考えています。

地図上で観察し、実際に歩き、現地の方から生の話を聞くという方法でこの講座を進めています。講座は毎月行われるため、参加者は参加できるときに参加してもらうという登録制をとっています。

現地までの交通は、10人乗りワゴン車3台を使用しています。

◆これまで探訪した地区

博物館の立地する小島田地区から歩きはじめ、下流方面では真島、柴、松代町小島田、牧島、大室、川田、牛島、綿内、上流方面は松代町西寺尾、清野、東福寺、岩野、土口、雨宮、御幣川、横田、塩崎、屋代、粟佐、杭瀬下、新田、小船山の各地区を1回あるいは場所により複数回探訪しました。

◆信濃川大河津資料館の見学

年に1回は研修と親睦のために、バスを使用して遠出をしようということで昨年の11月27日には、新潟県西蒲原郡分水町にある信濃川大河津資料館を訪ねました。大河津分水路は越後平野を水害から守ることを目的として、信濃川の洪水が越後平野で暴れ回る前に日本海へ流すために造られた人工的な河川です。千曲川流域だけでなく、下流の信濃川流域も同時に考えた治水の発想と視野が必要なことを教えられました。

◆「千曲川をあるく」通信の発行

毎回、事前学習したこと、探訪した地区などを参加者相互に情報として共有化するために、「千曲川をあるく」通信を作成発行しています。A4判4～8ページ立てカラー刷りの体裁です。現在までに22号を数えています。

◆夢を持って

千曲川流域は、源流から河口まで371kmの日本一の大河です。また河川には右岸と左岸があり、一口に千曲川沿いを歩くと行っても大変な時間と労力を要することとなります。しかしながら毎年少しづつ参加者の方と歩きながら新たな発見と情報を積み上げていきたいと思っています。

そして、いつかは千曲川と信濃川の両岸を踏査したいと夢を抱いています。

◆参加者随時募集しています！

平成17年度も参加者を随時募集していますので、興味関心がある方は是非ご参加ください。詳細は博物館までお問い合わせください。　（山口　明）

▲22号まで発行した「千曲川をあるく」通信

茶臼山の草花の1年　田んぼや畑の周りの植物調査

茶臼山自然史館のある茶臼山は里山・里地と呼ばれる環境です。里山・里地とは人の活動空間と自然（山や森林）の境界に位置し、自然を人が利用すること(農業や林業)によって成立した環境です。この里山・里地は私たちにとって身近なものであるのと同時に、多くの動植物が生息していることが知られています。昨年、友の会のワクワク自然同好会の皆さんと一緒に茶臼山自然史館の周りの田んぼや畦で4月から11月の間、月に1回の植物調査を行い、里山の植物の多様性と季節に対する草花の移り変わりを観察していきました。

調査と言っても難しいものではなく、調査コース（約1ｋｍ）を決めて、毎月、同じコースをゆっくりと2時間ほどかけて、花や実をつけた草木を探していきました。 今回の調査では草本種211種、木本種59種、なんと合計270種の植物が観察できました。調査コースを普通に歩いてしまうと見過ごしがちですが、その足下や周りには多くの植物たちが生息していることに改めて大きな驚きを感じました。また、元々茶臼山には自生していなかったセイヨウタンポポやハリエンジュなどの外来種は37種で全体の約14パーセントでした。

《４月・５月》

雪が溶け、日に日に暖かくなるこの季節は雪の中、春を待っていた植物が一斉に芽吹き、花を咲かせていました。まだ肌寒い早春から、黄色い花が綺麗なダンコウバイやヤナギの仲間が花を咲かせ、足元に目を向けるとタンポポ、オオイヌノフグリ、タチツボスミレ、カキドオシ、ハコベなどの小さな草花が咲いているのが観察できました。桜の開花は長野市の平地部に比べ標高の高い茶臼山では一週間ほど遅れるようです。また、よく見てみるとコナラやケヤキなども緑白色の小さな花を付けていました。

《６月～８月》

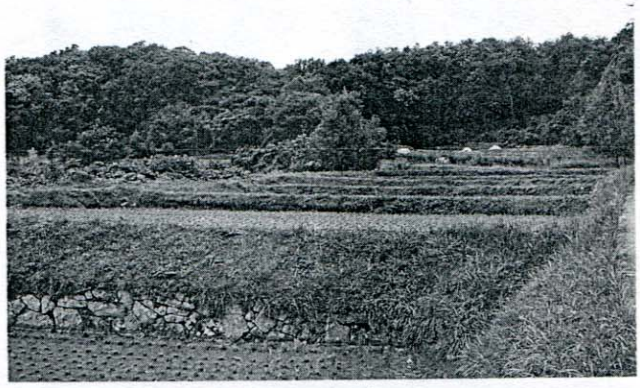
草丈がぐんぐん伸びる初夏には丈の低い春の植物に変わって、イネ科の植物とエゾカワラナデシコなど丈の高い草花とアレチウリ、ガガイモなどのツル植物が畦や農道の周りに繁茂していました。また、草刈りが行われている場所では草丈の低いイブキジャコウソウやウツボグサなどの花が観察できました。お盆を過ぎるとアキノノゲシなどの秋の花が目立ちはじめ、夏が終わるのを感じられました。

《9月～11月》

茶臼山では今年は10月末から木々が色づき始め、11月中旬に紅葉のピークを迎えました。多くの植物が実を付けており、その中にはコマユミやツルウメモドキなどカラフルで果肉を持つ植物が多く見られました。これらの実やクヌギやコナラなどのドングリは茶臼山に住むテンやタヌキ、鳥などの貴重な食物になっていると考えられます 。そして、11月末、ほとんどの木が落葉し、冬を迎えました。

《最後に》

見過ごしがちですが、私たちは四季を通して、様々な植物に囲まれて生活しています。皆さんの身近でも植物の数を調べてみるとその数の多さに驚かれると思います。茶臼山自然史館では森林内や見落としがちだったイネやスゲの仲間やシダの仲間などにも対象を広げて、引き続き調査を続けていきたいと考えています。身近な植物に関するご質問がありましたら、お気軽にお問い合わせください。（三上光一）



▲調査地（自然史館周辺 10月）

▲調査風景（自然史館周辺 4月）

寄贈・寄託資料の紹介

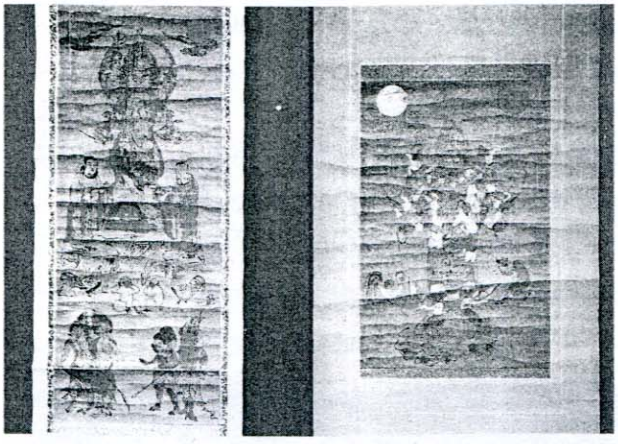
平成16年度も多くの資料の寄贈・寄託をいただきました。厚くお礼申し上げます。（敬称略・五十音順）

（寄贈資料）

荒木宏	（上野）	かんじきほか
小澤公行	（神楽橋）	謄写版・蓄音機
熊原貞夫	（東寺尾）	庚申講道具
小島一真	（篠ノ井）	お釜・どうぶかし
駒沢春男	（三才）	桑切り機ほか
小宮山友雄	（稲田）	雛人形・土人形
清水治男	（東後町）	金物店資料
滝沢力本	（篠ノ井）	コモ足ほか
竹内廣子	（松代町）	唐箕ほか
西川堅二	（川中島町）	謄写版
松山安幸	（三輪）	大鋸・棒秤
宮下晶夫	（安茂里）	地図
渡辺謙一	（南千歳町）	打掛・琴

（寄託資料）

伊藤亘利	（東寺尾）	庚申講道具
上村与四郎	（若穂）	古文書
関川喜八郎	（上高田）	掛け軸・古文書
竹内寿雄	（川中島町）	仏像ほか
南長池区	（南長池）	区有文書
宮下晶夫	（安茂里）	幻灯機・ガラス原板
四ツ屋財産区	（川中島町）	絵図面



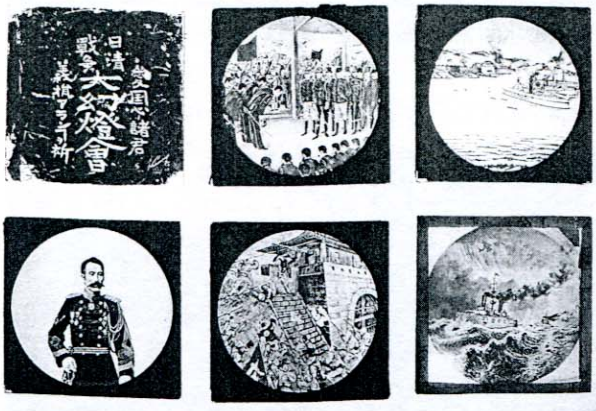
▲庚申講掛軸

（左：伊藤亘利氏寄託　　右：熊原貞夫氏寄贈）

庚申講の主青面金剛は、三面の憤怒相とさまざまな武器を持つ六本の手、足下には鬼を踏みつけた姿で描かれます。

▲雛人形（小宮山友雄氏寄贈）

江戸時代幕末頃の雛人形です。人形の底に商標が貼られていました。



▲ガラス原板（宮下晶夫氏寄託）

現在のスライドフィルムに相当し、幻灯機を使ってガラスに描かれた絵を映し出します。143枚の内、多くは日清戦争の場面が描かれています。

▲大日如来坐像（竹内寿雄氏寄託）

江戸時代、川中島町四ツ屋で活動していた修験者、宝寿院の守り本尊です。宝寿院では3代にわたって、寺子屋の師匠としても活動していました。